



令和元年6月

スクールカウンセラー 中野隆治



「ハムレット」



つい先日、評判の「ハムレット」を見てきました。渋谷の駅近くにある有名な劇場で、しかも、評判はうなぎのぼり。場内は立ち見客が出る位の超満員でした。主役の俳優のハムレットの見事な演技、そのイケメンぶり、恋人オフィーリア役の女優の可憐さもさることながら、舞台の斬新さ、登場人物全体の澁刺とした動き、目まぐるしい舞台転換、何れを取っても申し分のない出来栄でした。舞台が終わってから、配役のオールキャストが、観客に挨拶するカーテンコールが何度も続き、最後にハムレット役の俳優への歓喜に満ちた声援が終わるまで、実に3時間という、夢見心地の舞台がようやく終わったのでした。

劇そのものは、これまでの「ハムレット」と全く同じの内容でしたが、高名なイギリス人の演出家の工夫が随所に施されていて、音楽効果のリアルさと相まって、最後まで気の緩みのないドラマを見ているようでした。主役級の4人が、最後に全員死んでしまうという、暗さを超絶した悲劇でありながら、なぜ感動がこれほど後を引くのだろうと考えていました。帰りの廊下を歩く人達の中で、多分、高校生ぐらいの女子の泣いている姿も見かけました。名作に名優、シェイクスピア恐るべしです。

ただ一つ、気になったのは、デンマーク国の王子ハムレットの、余りにも疑り深い性格と、優しさとほとんど表裏一体となった優柔不断の性格でした。ハムレットがこの性格でなければ、亡き父・前国王を殺した現国王である叔父への復讐は果たされ、関係者全員が死んでしまうという悲惨な結末はなかったのではないかと。あるいは、恋人オフィーリアの発狂も免れたのではないかと。一人の人間の性格の及ぼす心理的な影響を、天才シェイクスピアは早くも、遙かな昔のロンドンの舞台で完成させたこととなります。心理学の研究の対象としても、十分にふさわしい題材だと思いました。

さらに、面白いことに、ハムレットの科白一つ一つが、今に残る名言でちりばめられていることでした。狂気を装ったハムレットは、奔放な言葉で周囲の人達を圧倒します。「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ。」と一人悩むハムレット。父を殺した、父の弟の現国王の妻になった母親に、今の時代ではとても通用しませんが、「弱き者、汝の名は女だ。」と言ってみたり、親友の哲学者ホレイシヨーンには、「この世には、君の哲学では解決できないことがたくさんあるのだよ。」と断言したりします。気の狂ったオフィーリアには、「オフィーリア、尼寺へ行け。」と言い、家臣から何の本を読んでいるのかと聞かれると、「言葉、言葉、言葉。」どこかで聞いたことのある名言が、ハムレットの口から、次々と叫ばれるのです。

みなさんも、図書室で一度、イギリスの劇作家、ウィリアム・シェイクスピアの戯曲(劇の台本)「ハムレット」を手にとることをお勧めします。みなさんと同じ年頃の若者の、苦悩と悲しみが、ひしひしと伝わって来ると思います。いつの時代にも変わらぬ、生きることを訴える傑作をぜひ味わってみて下さい。